

# 図書館だより

97. 12

## 天空の露伴

国文学 関谷 博

幸田露伴は明治と元号が改められる一年前の1867年に生まれ、1947年千葉県市川の仮寓で息をひきとりましたから、今年は露伴生誕百三十年であると同時に没後五十年に当たります。彼の人生は、幸か不幸か明治国家体制の成立と終焉にピッタリと重なり合っていたわけです。その意味については、小説を書き続けることを通じて露伴自身が明らかにしてゆくことになるのですが、今回ここでとり上げたいのは、風の話です。

露伴は風揚げが大変に好きだったようです。満年令で二十四才の頃のこと、風の強い野辺を散歩していると村童が風を揚げています。そこで露伴「ア、今年は俗事多く、未だ紙鳶を揚ぐる



### 目次

天空の露伴 関谷 博 ……1  
時禱書の世界 ……3

1997★こんな年でした ……5  
お知らせ ……6

の快味に接せず」とつぶやいた、と、その時同行していた石橋忍月が「君は何時まで子供ぞや」とあきれながら書き残しています(「四天狗探梅の記」明24・1)。実際、腕には相当自信があって、凧を揚げるのに「方三尺、すなはち踏み石三個を出でずと豪語し、まったくその通り立木の枝のひまを縫って上手に揚げ」た、と娘の文は記しています(「天うつ浪」昭24・6)。露伴が凧について書いた文章としては、「紙鳶の賦」(明31・1)、これは徒然草風に様々な凧の種類を説明したもの。また「紙鳶遊び」(明43・6)では、少年時代を回想して凧の色々な遊び方を紹介しています。他にも、江戸随筆の伝統に則った考証スタイルで日本と中国の凧の歴史を明らかにした「日本の遊戯上の飛空の器」(大2・8)などが挙げられます。



＜モース『日本その日その日』より、凧の図＞

少年時代の露伴は、仲間の中に入り一緒に夢中になって暴れ回る、というよりは、一步退いて懐手などして皆の遊ぶのを見ているというタイプの子だったということですから、或いは凧揚げのような個人主義的な遊びが性に合っていたのかも知れません。真っ青な空に、見えなほど高く揚がってポツンと浮かんだ凧から、自由な精神がひきうけなければならぬこの社

会を生きることの孤独を感じとっていたのではないか、というのは僕の単なる空想です。

彼の凧好きは、長男の成豊に受け継がれました。文の随筆(前掲)に拠ると、幼い頃から冬になると重い霜やけになる成豊は、父に揚げてもらった凧の糸をへこ帯に結びつけてもらい、「わづかにとときどき縋帯と手袋の巨大な手に糸をこづいて見て、凧の感応に満悦してみた」そうです。「のちに父は、一郎(成豊のこと……引用者)の凧を愛する殆ど陶酔であったと云ってゐる」。そこへ、近所の腕白どもが喧嘩凧を近寄せてきて、ほんやり自分のばかり眺めているのをいいことに、雁木にひっかけて彼の凧をぶつんとやっつけてしまいます。この雁木とその使い方については、E・モースの『日本その日その日・2』(1917)の説明を借りましょう。

男の子達は、単に紙鳶をあげてよろこぶばかりでなく、屢々紙鳶を戦わせる……紙鳶屋で、紙鳶の糸に取りつける、簡単な木製の装置を売っているが、この装置の深い刻み目に(中略)鋭い刃がついている。紙鳶をあやつることによって、その糸を相手の糸の上に持って来ることが出来る。そして、それを引きよせている内に、糸は刻み目にすべり込んで切断される。

再び文の随筆に戻ります。こうして度々泣かされては帰ってくる息子の姿を見せられていた、そんな或る日のこと、露伴は釣の道具箱を出して何かやってから、文と成豊を連れて原っぱに出かけました。そして腕白たちの凧揚げをしているところへ自分の凧を揚げると、傍若無人に

(5頁以下)



## 時禱書の世界

このたび館では、落合健一先生より

トリノ＝ミラノ時禱書 (トリノ粒類籙 ファクシミリ版)  
 卅トリノ時禱書残闕 国際共同出版 980部うち  
 日本版は50部で、岩波書店 '96年発行 130万円  
 という、もう入手不能の書を頂戴した。先生には御在職中より、多くの書物を辞儀なしにいただき、感謝の言葉もない。

教会公式の祈りの聖務日禱は、古くから1日8回、3時課とか朝課とか定時に祈った。今も続けられ、観想修道会では荘重に歌う。

時禱書は、この聖務日禱に由来する。個人が教会の聖務の形で用いる祈りの本、したがって内容も形式もゆるやかな面がある。時禱書は、1日の、1週1月1年の定時の祈りを構成するので、本来の聖務日禱やミサ典礼文などの一部や祈りが自由に生まれ、カレンダー(聖人記念や農業歳時も含み)から天体宮まで並べ、制作依頼者や編纂者の信仰的志向を明白にする。

挿画の主題、構図には、時代や国の特色が示される。父なる神や聖マリアと同じ画面に狩猟収穫や酒宴も見られる。点景の小物、動物、本文縁飾りの蔦にまで意味があり、興味深い。

画面の下部を三角で仕切り、或いは遠景描写風に、別な主題を加えたりもする。過去現在未

来を同画面に描く、当時の約束ごとも見られる。

丹念な本文の字列も見事ながら、文頭の1字を大きな花文字とし、DやPの字の中に美しい細密画を描いて飾る。画題をその章の大意と重ねるものもあり、時禱書は強く心を打つ。夜は闇、昼の光は神の恵み、中世の想いがある。

紙も印刷もない時代、ヴェラムに直接書き入れるには、時間と技能が必要だし、編纂には典礼の知識も欠かせない。時禱書は大層高價になり、生涯かけても庶民の手には入らなかった。

いま残された多くの時禱書は、王候貴族が用いたもので、その名がかぶせられている。フランス王シャルルV世の弟、ペリー公がランブール兄弟らに作成させたペリー公のいともしき聖母時禱書が、多くの彩色写本中、テキストもすぐれ画も美しく、構成が2段3段と整って、最高の時禱書と言われる。その続篇が頂戴したトリノ＝ミラノ時禱書で、経過や書誌は別冊の解説に詳しく、今はふれない。

ファクシミリながら、トリノ時禱書残闕は美しく重く、もの想うことが多い。

(TA)

トリノ＝ミラノ時禱書は[196.1-To67-1-4]ですのでご覧下さい。







< 図版はトリノ時祷書残闕RF20-24 聖母マリアと福音史家ヨハネが並び、ヨハネの持つ書には、ヨハネ福音書の冒頭が記されている >

様々な曲芸をして見せました。

それからである。天うつ浪（父の凧の名のこと……引用者）はまさに怒濤であった。

笄のやうな唸りを張ってゐるやつも、尾っぽの長いやつも吹っ飛ばされた。小さい奴さんをあわてておろしてゐる子もゐる。当の弟よりも私は復讐の快感と、復讐の惨酷に興奮してしまつた。

敗れた腕白たちは「子供の喧嘩に親が出た」と正当な抗議をしますが、勿論露伴はそんな理屈を聞く耳は持ちません。逆に「凧はいくらでも代りを買ってやるぞ、もう一度合戦するか」とおどかさず始末です。一見、脱俗的で悟りすましたようであるが、いざという時には、平然と俗世間のただなかに降り立って情容赦もなく自分の我を貫こうとする、こうした<狂暴さ>は、露伴文学のいたるところに窺うことができます。その意味で、この文の残したエピソードが僕には大変興味深く思われるのです。（ちなみに、先に掲げた「日本の遊戯上の飛空の器」で露伴

は、中国の凧に関する伝説と記述とが「多く軍事に属して居る」点に注目しています。）

※

ついでにもう一つ。僕は本を読んだりテレビを観たりしながら「露伴ならこれをどう思うかな？」と想像することがよくありますが、そんな中で宮崎駿『天空の城ラピュタ』は、露伴が観たら絶対好むに違いないと、これは、もう、確信の域に達しているといつてよいでしょう。あの作品は、勇敢な少年と可憐な少女が凧（偵察用グライダー）に乗ってラピュタ城にたどり着き、<人間を幸福にする文明とはどのようなものか>という問題をめぐって闘う物語ですが、この問いこそ、露伴文学の根本的なテーマであったからです。

#### <参考文献>

『露伴全集』全40巻・別巻2 岩波書店 [918.6-Ko78i]

『幸田全集』全23巻 岩波書店 [918.6-Ko78i]

『日本その日その日』全3冊 平凡社新洋文庫 [080-To64-N71]

### 1997★こんな年でした

#### <〇〇周年>

- |                       |  |
|-----------------------|--|
| 150周年 『シエーン・エア』 『嵐が丘』 | 100周年 雑誌『ホトキス』 日刊英字新聞『The Japan Times』 『若菜集』 |
| 90周年 『ニルスの不思議な旅』 『蒲団』 | 80周年 『父帰る』 『月に吠える』 『塚崎にて』                    |
| 60周年 『雪国』             | 70周年 岩波文庫発行                                  |
| 50周年 『ノンちゃん雲に乗る』 『斜陽』 |  |

#### <没〇〇年>

- |                                |                                 |
|--------------------------------|---------------------------------|
| 100年 西周(1829.2.3-1897.1.31)    | 50年 幸田露伴(1867.7.23-1947.7.30)   |
| 70年 芥川龍之介(1892.3.1-1927.7.24)  | 50年 織田作之助(1913.10.26-1947.1.10) |
| 60年 中原中也(1907.4.29-1937.10.22) | 50年 横光利一(1898.3.17-1947.12.30)  |
| 30年 山本周五郎(1903.6.22-1967.2.14) | 20年 湯音寺潮五郎(1901.3.13-1977.12.1) |
| 30年 壺井栄(1900.8.5-1967.6.23)    | 10年 深沢七郎(1914.1.29-1987.8.18)   |





### 注意！！

図書館内での“ポケットベル”“携帯電話”類の使用を禁じます。呼び出し音や通話による話し声は、周りの利用者に大変迷惑です。図書館利用マナーは守ってください。

### 卒業するあなたへ

卒業後も使い慣れた母校の図書館をどうぞご利用下さい。利用証を作成しますので、最初の来館時に身分を証明できるものを何かお持ち下さい。その日からすぐにご利用いただけます。

詳しくは館員までお問い合わせ下さい。

## 冬休みの図書館

- 期間 12月16日(火)ー1月14日(水)  
\* 1月7日(水)はコンピュータの起ち上げ作業のため、一部の業務の開始が遅れます。
- 開館時間 月一金 9:30ー16:30  
 土 9:30ー12:30
- 休館日 12月24日(水)ー1月6日(火)
- 長期貸出 12月9日(火)より開始します。  
 1月21日(水)が返却日です。  
 1月7日(水)からは通常貸出(2週間)となります。
- 貸出冊数 通常通り(10冊)です。



詳しくは掲示板・配布資料をご覧ください。

藤女子大学 図書館だより

第52号 1997.12

発行者 札幌市北区北16条西2丁目 藤女子大学図書館  
 TEL 011-736-5405 FAX 011-709-4770